

宗祇独吟「本式連歌百韻」去嫌一覧（Ⅱ）

		季	十	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	積	人	名	衣	時	夜	風	聞
三 表	53	ふるさとに きてはうちなく ほととぎす	夏					鳥			居												
	54	おもへはむかし けにそかなしき				述																	
	55	かかれとは いさめさりつる みをすてて				述											人						
	56	こころをたにも むなしくやせむ																					
	57	はるをへて はな はうらみぬ あさちふに	春	花			木草				□												
	58	わかやとからの つき なかつみそ	春	月							居		聳	光			人				夜		
	59	そてこゆる なみにひとよを あかしかた								水							名	衣	△	夜			
	60	ともとやきかむ ちとりなくなり	冬					鳥		水							×						
	61	やまかけの ゆき のかへるさ ふねさして	冬	船					山	水		降											
	62	くもさへさひし くれふかきそら											聳							夕			
裏	63	あきとしも いはれぬやみの うきならむ	秋		恋												人						
	64	わかづゆけさは くさきにもみず	秋				草木					降					人						
	65	かせつらき まくらなのへを けさわけて			旅															朝	×	風	
	66	ゆめもやたひの みちまとふらむ		夢	旅																夜		
	67	ゆくはさそ おもひやるたに うつのやま			旅				山									名					
	68	せきはありとも こころへたつな							山														
	69	くるしとは なけかざるへき ひとめかは			恋												人						
	70	ことなくてこそ はてまほしけれ																					
	71	ほとあらし よはひのうちも いかならむ				述																	
	72	かたふく つき の すゑのむらくも	秋	月									聳	光							夜		
裏	73	はつしくれ しくれもあへず あきふけて	秋									降											
	74	またうすもみち かつそちりゆく	秋				木																
	75	のわきたつ ころこそやまも あはれなれ	秋						山													風	
	76	きりさむけなる かはつらのさと	秋							水	居	□	聳										
	77	わたしもり たれにまたれて いそくらむ								水							人						
	78	みをつくすとも ひとはおもはし			恋												人						
	79	こひせよと なれこしよかは うらむなよ			恋																		
	80	こころとみちは ふみそまよへる																					
名	81	ゆき のよの ゆふつけとりに やまこえて	冬		旅			鳥	山			降									夜		
	82	あくもふかし まきたてるかけ					木		山											△	夜		
	83	たきなみに ゆめはいくたひ かへるらむ		夢					山	水											夜		
	84	おもひしつめぬ かせのしたいほ									居											風	
	85	いとへとも みはたたちりの うちにして															人						
	86	こころならでも よをやつくさむ																					
	87	たまのをの たゆるをまては あやにくに				述																	
	88	きえぬものから あたしののつゆ	秋			述						降					名						
	89	はなすすき なひくはかりに かせみえて	秋				草															風	
	90	つき にほのめく はつかりのこゑ	秋	月				鳥						光							夜		聞
裏	91	ねさめ せぬ ひとあはれを いつしらむ															人				夜		
	92	うきをわかすは こころならめや																					
	93	とへかしな あめうちかすむ まとのまへ	春								居	降	聳										
	94	おもひくらせる やまさとのほる	春						山		居												
	95	たたいまを みよとや はな は しをるらむ	春	花			木																
	96	のへはさかりの あきかせのころ	秋				□																風
	97	かりころも こたかてにすゑ つゆわけて	秋					鳥				降							衣				
	98	あさふむみちに こまそいはふる						獣												朝			
	99	うちいてて すすしくむかふ せをひろみ	夏							水													
	00	すめるやいくよ きよきやまみつ							山	水													

宗祇独吟「本式連歌百韻」去嫌一覧 (I)

		季	十	恋	旅	述	植	動	山	水	居	降	聳	光	神	釈	人	名	衣	時	夜	風	聞
初表	01	ひかしけふ まつのおもはむ おいのはる	春	松		述	木																
	02	うめかをるのの わかなつむころ	春				木草																
	03	やまきはの さはみつとほく ゆき きえて	春						山	水		降											
	04	くるるやけふり むかひなるさと		煙							居		聳							夕			
	05	たかすむを わかやとりとや いそくらむ				旅					□						人						
	06	こころのあるは たひにみまほし				旅																	
	07	をはすてや かりねを つき に なくさめて	秋	月		旅								光				名			夜		
	08	ころもうつよの かせなしをりそ	秋																衣		夜	風	
	09	あまもやは なみのまくらは やすからむ								水							人				夜		
	10	あしへにかもの しもはらふこゑ	冬				草	鳥		水		降											聞
初裏	11	しつかなる なかれをさむみ ひはくれて	冬							水				□						夕			
	12	うかへるくもの そらのはかなさ											聳										
	13	ゆきとまる かきりはたれも しらぬみに															人						
	14	とほくちきるな としつきのすゑ												□									
	15	いまこむを きかはおそきも いかかせむ																					
	16	ゆかりにさへそ おもひうかるる			恋																		
	17	は なちらす かせもよわるは うきものを	春	花			木															風	
	18	やまはかすみに かねひひくおと	春						山				聳							□			聞
	19	はるかなる みねのとしひ かけふけて							山												夜		
	20	つき はたれにか こころすむらむ	秋	月										光			人				夜		
裏表	21	あきをあきと しれるはかりは おほきよに	秋																				
	22	ゆふへをわくは たたをきのこゑ	秋				草													夕			聞
	23	たのめおく つゆのみちしは あともなし	秋				草					降											
	24	われやはかれむ ひとはうくとも			恋												人						
	25	ともはみな よからむこそは ちきりなれ															人						
	26	とすれはさわく このうちのとり						鳥															
	27	くもかせに はるはこころの さそはれて	春										聳									風	
	28	こえぬやまなき は なのあらまし	春	花		旅	木		山														
	29	みよしのを わかふるさとと いつかみむ									居						人	名					
	30	みやこもうきみ へかたくそなる				述											人						
表裏	31	をさまらむ よをもしらぬは いのちにて				述																	
	32	いくさのにはも たたあきのつゆ	秋								×	降											
	33	かせわたる よもきか つき の しろきのに	秋	月			草							光							夜	風	
	34	むしのねたかく さよふくるそら	秋					虫													夜		聞
	35	うらみやは こたへはひとの わかさらむ			恋												人						
	36	おもひしらすは こひもしなはや			恋																		
	37	いたつらに なさむもいまは つらからて			恋																		
	38	あさまのけふり むねにのこさし		煙	恋				山				聳					名					
	39	いつくにか みるめもゆかむ ふしのたけ				旅			山									名					
	40	きえしまもなく つもるは つゆ き	冬									降											
二表	41	ふきかはり たゆめはかせの またさえて	冬																			風	
	42	ふゆをかなしむ わひひとのいほ	冬								居						人						
	43	はるになほ あふともわかみ いかならむ	春														人						
	44	なれこし は なそ としにすくなき	春	花			木																
	45	みとりそふ きはたたこけを いろなれや					木草																
	46	みつゆくやまの あきふかきころ	秋						山	水													
	47	さるさけふ いはのかりふし つき おちて	秋	月		旅		獣	山					光							夜		
	48	よはあけわたる しものかけはし	冬						山			降								△	夜		
	49	あたとめぬ ゆめとやくもも わかるらむ		夢									聳								夜		
	50	たつはなにその おもかけそうき			恋																		
裏裏	51	あちきなく わすれしひとに たえもせて			恋												人						
	52	たかわひさする ゆふへなるらむ			恋												人			夕			

消えぬものからあだし野の露

89 花芒なびくばかりに風見えて

《解釈》秋のあだし野。風はほとんどないが、わずかに花芒が靡いていることによって、風が吹いていることが知れる。あたり一面、いっぱい露。しばらくは消えないであろうが、消えないままであることなどない。いつか必ず消えるものなのだ。

※「野」に「芒」が寄合。例示にも及ぶまい。

※第八四句に「風」がある。「本式」でも同字は五句去だから、指合を生じている。

花芒なびくばかりに風見えて

90 月に仄めくはつ雁の声

《解釈》夜の秋の野。風はほとんどないが、わずかに花芒が靡いていることによって、風が吹いていることが知れる。仄かに聞こえる雁の声にふと空を仰ぐと、月に照らされてその姿が見える。初雁だ。もうそんな時節になったのだ。

※「芒」に「仄めく」が寄合。「仄めく」に「穂」を利かしている。例は「原にある芒」や「山につぶくらむ／ひかり仄めく三日の夜の月」(文明十四年閏七月一日「何木」四五／四六)など。証歌は「秋きぬと風も告げてし山里になほ仄めかす花芒かな」(千載・四・二四五、法印静賢)など。

月に仄めくはつ雁の声

91 寝覚めせぬ人はあはれをいつ知らむ

《解釈》ふと目を覚ますと雁の声が聞こえる。初雁だ。もうそんな時節になったのか。月に照らされて仄かにその姿が見える。秋の夜の情趣が身にしみる。もし夜中に寝覚めすることがなかったら、この情趣を味わうことはできなかっただろう。

寝ざめせぬ人はあはれをいつ知らむ

92 憂きを分かずは心ならめや

《解釈》世の憂さ・辛さが理解できてこそ人の心。何の悩みも迷いもなく、いつも朝までぐっすり眠ることができるよう人は、世のあはれを知ることはないのだ。

憂きを分かずは心ならめや

93 とへかしな雨うち霞む窓のまへ

《解釈》独居の窓。春霞の空から降り落ちる雨をつれづれと眺める。寂しさが身にしみる。君よ、春になったのにどうして訪ねてきてくれないのだ。私の気持ちを、君なら解ってくれるだろう。それが友情というものだ。

とへかしな雨うち霞む窓のまへ

94 思ひ暮らせる山里の春

《解釈》こんな山里でも、春には人目がしげくなる。寂しさは覚悟の上のことだが、時に、誰か訪れてくれる人がいないかと、あてもなく人を待つ。あいにくの雨。訪れる人などいるはずはない。それでも私は、窓の前で、霞の空から降る雨を眺めて一日を暮らすのだ。

思ひ暮らせる山里の春

95 たゞ今を見よとや花はしをるらむ

《解釈》山里の春。花の行方が気になり、一日を思い暮らす。盛りだった花も、今日はどこか萎れてゆく気配が感じられる。何だか「盛りの私を見るなら今のうちだよ」と花が言ってくれているような気がする。

たゞ今を見よとや花はしをるらむ

96 野辺はさかりの秋風の頃

《解釈》秋の野辺。今日は秋風がしきりに吹く。盛りだった草々の花も、どこか萎れてゆく気配が感じられる。何だか「盛りの私を見るなら今のうちだよ」と花が言ってくれているような気がする。

※「春の桜花」を「秋草の花」に取りなした叙景の季節の転換が鮮やかである。

野辺はさかりの秋風の頃

97 狩衣小鷹手にすゑ露わけて

《解釈》狩の装束に身をつつみ小鷹を手に据え、露に満ちた野辺の道を分けて行く。風がしきりに吹き、その度ごとに秋草をなびかせている。

※『老葉』に入集(四五〇)。芒・尾花が風に靡き露を散らす秋の野に、色さままの狩衣を着て小鷹狩に向かう貴公子たちの姿を配し、王朝物語のシーンを描く。ごとき世界が現出する。特別なテクニクは何も用いられていないが、要するにそれが宗祇の名人芸だということである。若い人は、しっかり味読してほしい。

狩衣小鷹手にすゑ露わけて

98 朝ふむ道に駒ぞいばふる

《解釈》鷹狩の朝。狩の装束に身をつつみ、小鷹を手に据え朝露の道を行く。乗っている馬も嘶く。

※「小鷹狩」に「駒」が寄合。先例は「まだ心あらかき小鷹をすゑ出だし／手訓れぬ駒の枯らす秋草」(文安四年九月六日「山河」九七／九八)など。

朝ふむ道に駒ぞいばふる

99 うち出でゝ涼しくむかふ瀬を広み

《解釈》夏の朝早く宿を出、道を行く。広くなった瀬の前に来ると、馬も涼しく心地よいのであろう、大きく嘶いた。

うち出でゝ涼しくむかふ瀬を広み

00 澄めるや幾世清き山水

《解釈》涼を求めて家を出て、広い瀬までやって来た。山から流れ出た水は、飽くまでも清らかに澄んでいる。この流れは、これから幾世代にわたって清く澄みつづけることであろう。

日まで慣れ暮らししてきたこの世で、誰が私に「あの人に恋しなさい」などと言ったでしょうか。全ては私の心のなせる業。誰かを恨むべきではないでしょう。

心と道は踏みぞまよへる

81 雪の夜の木綿つけ鳥に山こえて

《解釈》まだ夜が明けきらない雪の山道。どうもマズいことに、道を間違えてしまったようだ。そもそも、こんな天候なのに、先を急ぐ心のあまりに、鶏が鳴くとすぐに宿を出て山を越えようとしたのがいけないのだけれど、どうしよう。

※「踏む」に「山」が寄合。所謂「体付」である。先例は「遠近に刈るや田の面を踏みならし／山をへだてゝ渡る小牡鹿」(美濃千句・第三「山何」五三／五四)など。※『老葉』に入集(六四六)。抽象的な前句を受けて、それを冬の山路を急ぐ旅人の状況として見事に具体化した付合である。言外の論理もびつたり決まっている。

雪の夜の木綿つけ鳥に山こえて

82 明くるも深し真木たてるかげ

《解釈》先を急ぐ旅。まだ夜も明けきらないのに、雪の中、鶏鳴の声とともに宿を出、山越えの道を行く。夜は次第に明けてくるが、常緑樹の立ち並ぶ陰はまだ闇が深い。※指摘するまでもないが「夜」に「明く」が寄合(例示省略)。

※「真木」は「本式」では山類とされる。従って、第八一〜八三句と、山類が三句連続することになる。体用の沙汰については、次句で述べる。

明くるも深し真木たてるかげ

83 滝波に夢は幾たびかへるらむ

《解釈》夜は次第に明けてくるが、常緑樹の立ち並ぶ陰は、まだ闇が深い。滝の音が聞こえる。夢の記憶が甦る。たぎり落ちる滝の波は決まてかえることはないが、夢は何度でも過去にかえってゆくのだ。

※表面上、前句と付句との間に論理的関係が全くない付合のようであるが、そうではない。夜明けの山は人気もなく静かで、当然、滝の音も谷の方から聞こえるはず。その滝の音に、旅人の昨夜見た夢がふと甦るというのは、納得できる状況設定であろう。味読してほしい。以上、若い人のため。

※第八一句以降、山類が三句連続し、体用の沙汰が必要となるが、第八一句の「山」は体、第八三句の「滝」は用で、体用を異にするから、問題は生じない。

滝波に夢は幾たびかへるらむ

84 思ひしづめぬ風のした庵

《解釈》世を厭い、風が吹き下ろす山陰のこの庵に住むこととしたのだが、心が落ちてくことはない。夜、滝川の波の音に、ふと目を覚ます。たぎり落ちる滝の波は決まてかえることはないが、夢は何度でも過去にかえってゆくのだ。

※「風のした庵」という措辞が非常に珍しく感じるが「涼しさはいづくも間はじ山陰の松より落つる風のした庵」(藤谷和歌集・九〇)という例が検出される。

※「波」に「しづむ」が寄合。例は「志賀の浦風吹きわたる波の声／月しづみ行く鳩の海面」(大山祇神社法楽文明十五年千句・第三「三字中略」七三／七四)など。ただし、これは所謂「用付」だから、後の連歌では好まれない。

思ひしづめぬ風のした庵

85 いとへども身はたゞ塵のうちにして

《解釈》俗世がイヤで、風が吹き下ろす山陰のこの庵に住むことにしたのだが、やはり心が落ち着くことはない。世を厭うと言っても、所詮は俗塵にまみれた世の住人なのだ。

※「風」に「塵」が寄合。先例は「日も夕立ぞ風まぜに降る／塵あぐる馬のひづめは見えわかで」(顕証院会千句・第二「何人」一二／一三)など。

いとへども身はたゞ塵のうちにして

86 心ならでも世をやつくさむ

《解釈》世を厭うと言っても、所詮は俗塵にまみれた世の住人。不満足でも、こうして死ぬまで生きて行くことになるのだろう。

※「身」に「心」と付けている。例は「名残かず／捨つる身にあり／世の中を心強くも住みかへて」(文安雪千句第五「何田」四六／四七)など。また「塵」に「世」が寄合。「塵の世」の成語に拠る。例は「塵にまじはる道の辺の暮／世にふるも軽き身もやは安からむ」(天文十八年梅千句・第一「何木」八二／八三)など。

心ならでも世をやつくさむ

87 玉の緒のたゆるを待てばあやにくに

《解釈》自分には、これ以上生きていてもいいことなど何もある訳はない。ただひたすら命が絶えるのを待つのみなのに、中々思いどおりにならない。私の人生は、最後の最後まで思いどおりにならないものだったようだ。

玉の緒のたゆるを待てばあやにくに

88 消えぬものからあだし野の露

《解釈》ただひたすら命が絶えるのを待つのみこの身。どうして、あだし野の露がすぐに消えるように、思いどおりにならずに消えることができないのだ。

※「ものから」は連体形接続だから、「消えぬ」の「ぬ」は打消。また、『徒然草』七段の「あだし野の露きゆる時なく、鳥辺山の煙たち去らでのみ住みはつるならひならば」云々の有名な一節のごとく、「あだし野の露」は、必ず消えるものとされる。従って、付句は「あだし野の露のように(中々)消えない」の意で、付合の解釈は右のごとくである。

※「あだし野」は山城国の名所。京都市西京区の小倉山東麓の一帯。

※「玉の緒」に「消ゆ」が寄合。先例は「何のためとて残る玉の緒／消ゆばかり我が身は人にいとはれて」(延徳四年三月十九日「山何」一八／一九)など。証歌の必要はあるまい。ただし、これは所謂「用付」だから、後の連歌では好まれない。

ことなくてこそ果てまほしけれ

71 程あらじ齡のうちもいかならむ

《解釈》私の命が尽きるのも、もう間もなくのことでしょう。それまで、どのようなことがあるか知れませんが、何とか平穩に人生を終えたいと願っています。

程あらじ齡のうちもいかならむ

72 かたぶく月のすゑのむら雲

《解釈》月は西の夜空に傾き、その末には叢雲が漂っている。月が沈むまでの間にも、どんな天候になるか知れたものではない。

※「齡のうち」を、月齡が変わらないうち（つまり、月が沈まないうち）に取りなした付合である。発想が意表を突き、そこに俳諧味が生じている。近代の研究者にはほとんど無視されているが、これも宗祇の一体。

※「齡」に「月」が寄合。「月齡」の成語に拠る。他の例は「末の齡を何かたのまむ／夜な／に語らふ月は傾きて」（熊野千句・第五「何路」四八／四九）など。

※一句の季は「月」で秋季。第六四句が「露」で秋季で、間隔は七句。その点は問題がないが、その間に他季の句が存在しない。第五句及び第四八句の所に示した作法に違反していると思われる。如何。

かたぶく月のすゑのむら雲

73 初時雨しぐれもあへず秋更けて

《解釈》更けゆく秋の夜。初時雨が降るといふほどもなく降り通って行った後、空は晴れ、月は西に傾きはじめた。その末に叢雲が漂っているが、あれは、先程の初時雨を降らせた雲なのだろうか。

初時雨しぐれもあへず秋更けて

74 まだ薄紅葉かつぞ散りゆく

《解釈》秋も更け初時雨が降ったが、少し降り通っただけで過ぎて行った。山の紅葉はまだ薄く、それが風にはらはらと散っている。

※「時雨」に「紅葉」が寄合であるが、それは指摘にも及ばないこと。それよりも、この付合では「初時雨」に「薄紅葉」としている所がミソ。蛇足かも知れないが「君がさす三笠の山の紅葉の色彩無月しぐれの雨の染むるなりけり」（古今・一九、一〇一〇、つらゆき）のごとく、山を紅葉に染めるのは時雨だというのが古典文学の常識。「初時雨」がちよっと降り通っただけだから「まだ薄紅葉」という理屈である。他の例は「初時雨とやしたひ出でけり／棹鹿の声する方の薄紅葉」（宮島千句・第五「何船」六六／六七）など。

まだ薄紅葉かつぞ散りゆく

75 野分だつ頃こそ山もあはれなれ

《解釈》変に強い風が吹きはじめ、木々はまだ薄紅葉なのに、はらはらと散らされている。野分が近づいているのか。秋の山の風情がとても趣深く感じられる。

野分だつ頃こそ山もあはれなれ

76 霧寒げなる川づらの里

《解釈》川に面した里は霧につつまれ、何だか肌寒い。変に強い風が吹きはじめた。野分が近づいているのだろうか。山の風情も、とても秋の趣深く感じられる。

※「山」に「川」と対比的な寄合（例示省略）を用いて、視線を転じた付合である。

霧寒げなる川づらの里

77 渡しもり誰に待たれていそぐらむ

《解釈》川に面した里は霧につつまれ、晩秋の寒さが身にしみる。霧で私の姿がみえなかったのだろう、渡し守は、私を待つことなく急いで岸を離れて行った。向こう岸で船を待つ人がいて、その人が呼んだのであろうか。

※深い霧で、船に乗りうと近づく人も、向こう岸で待っている人も視覚的に認識することができないということで、前句の「霧」が効果的に利用された付合と言えよう。

※「川」に「渡し」が寄合だが、例示の必要はあるまい。

渡しもり誰に待たれていそぐらむ

78 身をつくすとも人は思はじ

《解釈》渡し船が岸を離れる。向こう岸では誰が待っているのだろうか。水脈を示す標識を目当てに、棹を取り川の兩岸を往来して一生を終える。そんな渡し守の人生を、船に乗る人が思いやることはあるまい。

※「身をつくす」に「濯標」を利かせるのは、古典文学でパターン化された手法。「わびぬれば今はたおなじ難波なる身をつくすくしても逢はむとぞ思ふ」（後撰・一三、九六〇、もとよしのみこ）の和歌が有名。

身をつくすとも人は思はじ

79 恋せよとなれ来し世かは恨むなよ

《解釈》あの人が恋しくてなりません。このままあの人に逢えないなら、私は恋死にしようとも知れませんが、けれど、あの人は、そんなこと思ってもみないでしょう。何故こんなことになってしまったのか。今日まで慣れ暮らしてきたこの世で、誰が私に「あの人に恋しなさい」などと言ったのでしょうか。誰も言いはしません。恨んでも仕方ありません。全ては前世からの因縁なのです。

※前句の「人」は、先の付合では渡し船の乗客。それを、恋の対象である相手のことに取りなして、スムーズに恋に句境が転換する。

※付句は、短い句形の中に命令表現・禁止表現・反語表現が盛り込まれており、宗祇以外あり得ないような仕立となっている。宗祇連歌の仕立上の特徴がよくわかる句であろう。若い人のため。

恋せよとなれ来し世かは恨むなよ

80 心と道は踏みぞまよへる

《解釈》あの人が恋しくてなりません。何故こんな道に迷い込んでしまったのか。今

もいづちむなし山かげ」(伊庭千句・第四「何文」六一／六二)なども、この故事に依拠する付合である。他に「千鳥」に「雪」も寄合(例示省略)。

※『老葉』に入集(五七〇)。「連集良材」にも、もとの故事と共に収載されている。

※第五九句以降、水辺が三句連続する。従って体用の沙汰が必要となるが、第六一句の「船」は「体用の外」であるので、問題はない。

山かげの雪のかへるさ船さして

62 雲さへさびし暮深き空

《解釈》雪の日の帰り道。船に乗って山陰の川を下って行く。次第に暗さを増す夕暮の空。雲の色が寂しさをかきたてる。

雲さへさびし暮深き空

63 秋としもいはれぬや身の憂きならむ

《解釈》秋となったが、あの人からは、こそこずつと何のたよりもない。せめて「秋が来たのだ」飽きが来たのだ」という程の知らせでもあったら、まだ私のことを意識してくれているのだと思えるけれど、それすらもない。私はあの人にとって、所詮その程度の存在でしかなかったのだ。次第に暗さを増す夕暮の空。雲の色が寂しさをかきたてる。

秋としもいはれぬや身の憂きならむ

64 我が露けさは草木にも見ず

《解釈》秋となったが、あの人からは、ずっと何のたよりもない。せめて「秋が来たのだ」飽きが来たのだ」という程の便りでもあったら、まだ私のことを意識してくれているのだと思えるけれど、それすらもない。私はあの人にとって、その程度の存在でしかなかったのだ。何故こんな人を当てにしたのか。悔しくて涙があふれ袖を濡らす。秋の露が置かれる草木だって、こんなにびしょ濡れになることはないでしょう。

※第六一句で「雪」が用いられており、この句の「露」と間隔二句である。降物同士の間隔は「新式」では三句以上であるが、『連歌本式』には「降物と降物、可嫌打越」と規定されている。従って、指合ではない。

我が露けさは草木にも見ず

65 風つらき枕の野辺を今朝わけて

《解釈》野宿の朝。夜明けと共に野の道を分けて行く。風が身にしみる。草も木も露に濡れているが、旅のつらさで流す涙に濡れた私の衣は、それと比べられないほどびしょ濡れである。

風つらき枕の野辺を今朝わけて

66 夢もや旅の道まどふらむ

《解釈》野宿の朝。夜明けと共に野の道を分けて行く。風が身にしみる。昨夜の夢は何だったのか。もう思い出せない。夢も、どこかを彷徨っているのだろう。

※指摘にも及ばないが「枕」に「夢」が寄合。例示の必要もあるまい。

夢もや旅の道まどふらむ

67 行くはさぞ思ひやるだに宇津の山

《解釈》東国に向かう旅。宇津の山に一夜を過ごす。これから旅はどうなるのか、思いやるだけで憂鬱になる。見る夢も、近頃は知らぬ道を感へ行く夢ばかりだ。

※「宇津の山」は駿河国の名所。今の国道一号线の藤枝市と静岡市との境界、宇津ノ谷峠。『伊勢物語』第九段に見える「駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人に会はぬなりけり」の和歌が極めて有名。それに依拠して「夢」に「宇津の山」が寄合。連歌での先例は「うつゝを夢はなどまじふらむ／富士の根の雪に時雨るゝ宇津の山」(紫野千句・第七「山何」一二／一三)など。

※「思ひやるだに憂ゝ宇津の山」という秀句仕立てである。他に「涙ふりけり身は宇津の山」(寛正五年正月一日「名所」八六)など、よく用いられる。

68 関はありとも心へだつな

《解釈》私たち二人の関係はこれからどうなるのでしょうか。それを思いやるだけでも私の心は、宇津の山を越える旅人のように憂鬱になります。でも、宇津の山には関はありません。仮に私たち二人の間に厳しい関が据えられているとしても、お互いの心を隔てることはないようにしましょう。

※「宇津の山」には関がない」というのは、当時の知識人には常識。証歌は「旅寝する夢路はゆるせ宇津の山関とは聞かず守る人もなし」(新古今・一〇・九八一、家隆朝臣)。連歌では「何を関とかたづね来さらむ／夢にもと都に思へ宇津の山」(葉守千句・第七「二字露頭」七〇／七二)など、それを前提とした付合である。

69 苦しとは歎かざるべき人目かは

《解釈》人目の関に隔てられ、あなたと逢うことができない苦しさ。それを歎かずにはいられませんか。けれど、どうか身は隔てられても、心を隔てないで下さい。二人は、いつか逢えるはずですよ。

※「関」に「人目」が寄合。例は「関の小川の音羽路の山／人目にもあまる涙の滝を見よ」(宝徳四年千句・第四「何鳥」三八／三九)など。証歌は「あなわびし人目の関を越え分けて道を忘るゝ時の間ぞなき」(中文集・四〇)など。

70 ことなくてこそ果てまほしけれ

《解釈》人目の関に隔てられ、あなたと逢うことができない苦しさ。それを歎かずにはいられませんか。こんな苦しい思いをしつづけて生きるよりは、いつそあなたに逢えないまま死んでしまう方がましだと思ったりするのです。

しく回想される。

※「ありし世の親の諫めのまゝならば悔しく身をば嘆かざらまし」（続後拾遺・一六一〇七九、前大納言為氏）を念頭においた付合であろう。

※『老葉』に入集（一三五八）。平凡に懷古の情をいうだけの前句に、親の思い出を添えるだけで珍重の付合となる。これも名人芸。

かゝれとは諫めざりつる身をすてゝ

56 心をだにもむなくやせむ

《解釈》世の憂さに耐えかねて、身を捨てる決心をする。親は、私に、このような人生を歩めとは諫めなかつたはずだが、それも仕方がない。「身を捨てる」といつても、肉体を空しくすることは、死なない限り出来ない。せめて心を空しくして、清らかで悩みのない生き方をしようと思う。

心をだにもむなくやせむ

57 春を経て花は恨みぬ浅茅生に

《解釈》何回もの春を経て後、零落した私の宿は、いつの間にか浅茅生となつてしまつた。世間に対して恨みがましく思う気持ちはどうしても残るが、花は、そんな私の思いに関係なく、昔のままに美しく咲いている。花には、ただ美しく咲けばいいという以外の心はないのだろう。自分も、恨みを捨て、欲を捨て、そんな風に生きて行きたいと思う。

※「花には心がない」のではなく「花には、ただ美しく咲けばいいという以外の心はない」と感じるのが、宗祇連歌の解釈として正しい。第二〇句を参照されたい。

春を経て花は恨みぬ浅茅生に

58 我が宿からの月な霞みそ

《解釈》何回もの春を経て後、私の宿はいつの間にか浅茅生となつてしまつた。それでも花は、別段それを恨みに思わない様子で昔のままに美しく咲いている。月が霞んでいる。いや違う。落ちぶれたのは私の悲しみの涙で、月が霞んで見えているのだ。月よ、これ以上霞まないでくれ。

※「春」に「霞む」、「浅茅生」に「宿」が寄合。個々では指摘にも及ばないものであるが、一つの付合に二組が組み合わせられたら、ちよつとしたポイントとなる。

※「本式」には「景物」という範疇があり、『連歌本式』に「景物ならべて三句すべからず。打越にも不可為。雪・月・花・時鳥・寢覚を景物といふ也」と規定されている。第五七句で「花」、第五八句は「月」と、連続して「景物」が詠まれているので、次の第五九句では「景物」が出せない状況になっている。

※第五三句で「ふる里」が詠まれている。「本式」でも居所が五句去なら、「宿」が指合になる。

我が宿からの月な霞みそ

59 袖こゆる波に一夜を明石潟

《解釈》明石での旅の一夜。私の袖を越えていくかと思えるほど間近くまで波が打ち寄せる。漂泊の思いに駆られ寝付くことができない。月が霞んでいる。いや違う。私の流す涙で月が霞んで見えているのだ。月よ、これ以上霞まないでくれ。

※「明石」は播磨国の名所。兵庫県明石市の海岸付近一帯。

※「一夜を明かし」明石潟」という秀句仕立てである。

※「月」に「明石」が寄合。例は「波の音松ふく風に見て／思ひ明石の朝霧も惜し」（三島千句・第一「何路」九三／九四）など。証歌は「おぼつかかな都の空やいかならむ今宵明石の月を見るにも」（後拾遺・九五二三、中納言資綱）など。また、「霞」に「袖」が寄合。例は「行く行くしたふあとな霞みそ／袖を見よ空はしばしの春の雨」（文明五年八月十九日「何路」七八／七九）など。「霞の袖」の歌語に拠る。「行く春の霞の袖をひきとめてしほるばかりや恨みかけまし」（新勅撰・二、一三六、皇太后宮大夫俊成）など。

袖こゆる波に一夜を明石潟

60 友とや間かむ千鳥鳴くなり

《解釈》明石での旅の一夜。私の袖を越えて行くかと思えるほど間近くまで波が打ち寄せる。漂泊の思いに駆られ、中々寝付くことができない。千鳥が鳴いている。千鳥はいなくなつた友を呼んで鳴くというが、お前も友がいないのか。友のいない者同士、今夜は、お互いを友として語り明かそうか。

※「千鳥は友を呼んで鳴く」というのは古典文学の常識。「沖つ塩さしての磯の浜千鳥風さむからし夜半の友呼ぶ」（玉葉・六・九一八、権中納言長方）など。

※「明石」に「千鳥」が寄合。「一夜明石の船の楫音／千鳥鳴く寢覚の後は夢をたえ」（文安雪千句・第五「何田」二二／二三）など。証歌は「つく／＼と思ひ明石の浦千鳥波の枕になく／＼ぞ聞く」（新古今・一四・一三三一、権中納言公経）など。

※「友」は、この場合「千鳥」のことだから、第五八句の「我」と指合にはならない。

友とや間かむ千鳥鳴くなり

61 山かげの雪のかへるさ船さして

《解釈》雪の興に惹かれるまま、川の上流に住む友人を訪ねたその帰り道。船をさして川を下ると、山かげから千鳥の鳴く声が聞こえる。友と一緒にあの千鳥の声を聞けたらと思うが、今は仕方がない。一人で、あの声に耳をすまそう。

※前句の「友」に関連して、付句の「山かげ」「雪」「船」に拠り、戴安道と王子猷の故事を想起させる所がポイント。故事では「山陰」は地名。雪の日、山陰という地に住む王子猷が、興の赴くまま友人・戴安道を船で訪れて帰るといふ話である。

※「友」に「山かげ」が寄合。例は「添ひすてゝ帰るを友や慕ふらむ／つひにや我も山かげの庵」（永祿石山千句・第六「唐何」五三／五四）など。和歌では「たづぬべき友こそなけれ山かげや月と雪とを一人みれども」（続古今・六・六六六、皇太后宮大夫俊成）など。「友」と言わずとも「月雪にあらましかばの人も惜し／思ふ

水ゆく山の秋深き頃

47 猿さけぶ岩の仮ぶし月落ちて

《解釈》深まりゆく秋の山中で一夜を過ごす破目になってしまった。流れに面した岩の上を寝場所とするが、中々寝つくことができない。夜は次第に更け行き、叫ぶような猿の聲が怪しさを掻きたてる。月も、もう傾きはじめた。

※『老葉』に入集(一二〇四)。ただし、前句の下七字を「秋寒き頃」とする。厳しい寒さに猿も耐えかねて叫ぶのだということ、その方が効果的である。ただし、同面の第四一句に「冴えて」とあるので、「冴ゆ」と「寒し」は面を嫌わねばならないから、第四六句で「寒き」を用いることができない。句集の形は、入集に際し手を入れたものであろう。

※前の第四六句が山類であることは自明。後ろの第四八句も「棧」で山類である。「猿」は「新式」では山類として取り扱われず、それだと山類が打越になるが、『連歌本式』に「槇・桧原・関・猿、山類に用之」とあり、第四六句から第四八句まで山類が三句連続しているとして不都合はない。

猿さけぶ岩の仮ぶし月落ちて

48 夜は明け渡る霜の棧

《解釈》初冬の山中で一夜を過ごす破目になってしまった。岩の上を寝場所とするが、寒さで寝つくことができない。猿の叫ぶような声が怪しさを掻きたてる。月も傾き、眠れないまま夜が明けてゆくようだ。谷の向こうに一筋うす白く見えはじめたのは、棧に霜が置かれているのだらう。

※一句は「霜」で冬季。第四二句が冬季であることは自明だから、その間隔は五句。「新式」なら同季は七句去だが、「本式」は五句去。この場合、間に春季と秋季を挟んでいるので、規定どおりである。第五句を参照されたい。

※第四六句から「山」「猿」「棧」と山類が三句連続するので体用の沙汰が必要になるが、第四六句の「山」は体、第四八句の「棧」は用であるので、問題はない。

夜は明け渡る霜の棧

49 跡とめぬ夢とや雲も別るらむ

《解釈》未明に宿を出、山路にさしかかる。夜が明け行くにつれて、雲は峰を離れ、行く手には棧の霜が一すじ白く見える。昨夜、確か夢を見たはずだが、どんな夢だったか、もう思い出せない。

※「夜」に「夢」「棧」に「雲」と寄合を取っている。前者は例示の必要もあるまい。後者の先例は「暮るゝより峰の棧あともなし／雲路をわたる月ぞ影そふ」(文安月千句・第一「夕何」一一／一二)など。「雲の棧」の歌語に依る(例示省略)。

跡とめぬ夢とや雲も別るらむ

50 たつは何ぞの面かげぞ憂き

《解釈》夜が明け、横雲も峰に別れて行く。あの人はもういない。ただ訳もなく面影

が私の眼前に立ち現れるばかりである。辛くてならない。全ては夢の中の出来事だったような気がする。昨夜、あの人は本当に私の所に来てくれたのだろうか。

※「雲」に「立つ」が寄合。先例は「別れやさそふ峰の横雲／山風に花も心も浮き立ちて」(文安四年九月六日「山何」四八／四九)など。ただし、これは所謂「用付」なので、後の連歌では好まれない。

たつは何ぞの面かげぞ憂き

51 あぢきなく忘れし人に絶えもせで

《解釈》今更どうしようもないことだが、あの人は、私のことなどすっかり忘れていくことだろう。私も、あの人のことはもう忘れてもいいはずだけれど、何故か、絶えることなく面影が眼前に立ち現れ、私をつらくさせる。

※『老葉』に入集(一二〇四四)。男に捨てられた女性のせつない思いが、平易な語の組み合わせの中に、美しく見事に表現されている。宗祇の恋の付合としても一級品であらう。よく味読してほしい。

あぢきなく忘れし人に絶えもせで

52 誰がわびさする夕べなるらむ

《解釈》今更どうしようもないことだが、あの人は、私のことなどすっかり忘れていくことだろう。しかし、私はあの人を忘れることができず、この夕べもあの人をわびしく待つ。このわびしさは誰のせいなのだろう。私を捨てたあの人のなか、それとも、あの人を忘れることができない私なのか。

※先の付合について、この付合も一級品であらう。第五〇句からここまで、宗祇連歌の恋の付合のレベルの高さがよくうかがわれる。味読されたい。

誰がわびさする夕べなるらむ

53 ふる里に来てはうち鳴く時鳥

《解釈》ふる里の夕べ、侘しくてならない。誰が私の心を、こんなに侘しくさせるのか。そうだ、時鳥なのだ。時鳥がやって来て、華やかだった昔と同じ声で鳴く。だから、昔のことが思い出されて、私の心は侘しくなるのだ。

※前句の疑問に対し、付句がその鮮やかな答えになっている。句境の転換も自然で見事。宗祇のレベルでは並の上程度かもしれないが、やはりこれも名人芸。

ふる里に来てはうち鳴く時鳥

54 思へば昔げにぞかなしき

《解釈》今は寂れてしまったこの里にも、時鳥は変わらずにやってきて鳴く。それを聞けば、華やかだった昔が思い出されて、私の心は本当に悲しくなるのだ。

思へば昔げにぞかなしき

55 かゝれとは諫めざりつる身をすてゝ

《解釈》世の憂さに耐えかねて、身を捨てる決心をする。親は、私に、このような人生を歩めとは諫めなかったはずだ。親に愛され不自由なく育った昔が、本当に悲

思ひしらずは恋ひも死なばや

37 いたづらになさむも今はつらからで

《解釈》私が本気で心の底から恋しているということを、どうしてあの人は分かってくれないのだろうか。自分は、このまま恋死にしたいとさえ思う。あの人に逢ってももらえない辛さに比べれば、今は、死ぬことなど、辛くも何ともないことのような気がするから。

※「いたづらになる」は、「空しくなる」と同じように、「死ぬ」の意味で用いられる。

例は「先つころ、渡守が孫の童、棹さしはづして落ち入りはべりにける。すべていたづらになる人多かる水にはべり」（源氏物語・浮舟）など。ただし、前句に「死ぬ」とあるから、紹巴流の連歌なら「同意」として強く批判される所であろう。

いたづらになさむも今はつらからで

38 浅間の煙胸に残さじ

《解釈》この身は、もう今は、死んでしまったとしても辛いとは思いません。浅間山から立ち昇る煙のように私の胸にずっと立ちこめていた苦しさも、それで消えてしまうでしょうから。

※「いたづら」に「浅間の煙」と付けている。「いたづらに立つや浅間の夕煙里とひかぬる遠近の山」（新古今・一〇・九五八、雅経朝臣）の自讃歌が有名。連歌の他の例は「いたづらにやは春をちぎらむ／霞もぞ夕べの煙浅間山」（天文八年十月三日「何船」七四／七五）など。

※「浅間」は信濃国の名所。長野県北佐久郡軽井沢町、同御代田町、群馬県吾妻郡嬬恋村の境に位置する活火山。

浅間の煙胸に残さじ

39 いづくにか見る目もゆかむ富士の嶽

《解釈》東国の旅。私の心は、浅間山に立ちのぼる煙のように晴れないでいたが、富士が視野に入るようになると、その秀麗な姿に心を奪われ、しばらく目を移すことができない。晴れぬ思いも、何かすっきりするようだ。

※「富士」は駿河国の名所。静岡県と山梨県の境界に位置する。

※「浅間」と「富士」とが対比的な寄合。例は「半天に富士のねたくも名は立ちて／もとの契りぞすゑ浅間なる」（享徳元年九月二十一日「播磨国八社宝号」一三／一四）など。証歌は「信濃なる浅間の嶽も燃ゆなれば富士の煙の甲斐やなからむ」（後撰・一九・一三〇八、するが）など。勿論「煙」に「富士」も寄合（例示省略）。

いづくにか見る目もゆかむ富士の嶽

40 消えし間もなくつもる初雪

《解釈》富士の嶽が視野に入ると、その秀麗な姿に見惚れてしまい、しばらく目を移すことができない。今日は水無月の十五日。一年でたった一日、山頂の雪が消える日だが、今夜またすぐに初雪が積もるのだ。

※「富士の根に降りおく雪は水無月の望に消ぬればその夜ふりけり」（万葉集・三・三二〇など）の歌が有名。この歌に拠って、富士の雪は六月十五日に消え、その夜のうちに初雪が降るといいうのは古典文学の常識。それを前提とする付合である。

消えし間もなくつもる初雪

41 吹きかはりたゆめば風のまた冴えて

《解釈》初雪が降ったが、すぐに消えてしまった。風の方向も変わり、少し緩くなつたかと思う間もなく、また冴え冴えとしてきた。また雪になったら、今度は積もるかも知れない。

吹きかはりたゆめば風のまた冴えて

42 冬をかなしむ侘人の庵

《解釈》寒い風の方向も変わり、少し緩くなつたかと思う間もなく、また冴え冴えとしてきた。ただでさえ世を侘びて暮らす茅屋の住人にとって、冬は、とりわけ悲しい季節なのだ。

冬をかなしむ侘人の庵

43 春になほ逢ふとも我が身いかならむ

《解釈》茅屋に世を侘びて過ごすこの身には、冬の寒さがこたえる。けれど、いづれ春が来る。世間の並みの人なら、春になれば、楽しいことが沢山あることだろう。自分はどうか。そんなものは何もありはしない。それが、冬の寒さに増してつらくも悲しく思われるのだ。

※「冬」に「春」が対比的な語の選択。先例は「人も音せぬ冬／もる里／鶯の春つげそむる野は枯れて」（願証院会千句・第六「何田」八／九）など。

春になほ逢ふとも我が身いかならむ

44 なれ来し花ぞ年にすくなき

《解釈》またやがて春がやって来るが、若い頃から馴れ親しんできた花の古木も、枯死するものが多くなり、年ごとに数が少なくなっている。自分もどうなっているか、知れたものではない。

なれ来し花ぞ年にすくなき

45 みどりそふ木はたゞ苔を色なれや

《解釈》若い頃から馴れ親しんできた花の古木も枯死するものが多く、年ごとに数少なくなっている。残された古木には苔が生え、春になると、それが緑の色を添える。

みどりそふ木はたゞ苔を色なれや

46 水ゆく山の秋深き頃

《解釈》深まりゆく秋の山。谷の水の流れゆく音が聞こえる。木々の葉も色を失いつつある中に、緑の色が増して見えるのは、古木に生じた苔なのだろう。

※「水行く川」なら普通。「水行く山」という表現は非常にめずらしく、私の調査の範囲で、和歌からも、連歌からも、他に例が検出されない。

雲風に春は心のさそはれて

28 越えぬ山なき花のあらまし

《解釈》春になると、私の心は、雲や風に誘われるように浮き立ち、更にその奥に咲く花を見ようと、どここの山であろうと越えて行きたくなるのだ。

越えぬ山なき花のあらまし

29 御吉野を我がふる里といつか見む

《解釈》もう越えたことのない山はないほどの旅から旅の人生。故郷へ帰っても、もう私を知る人は一人もいないだろう。私にとって、故郷はもう故郷でなくなっている。自分はどこを故郷とすればよいのだ。吉野に居をしめ、そこを終の住みどころとして年々の花を眺めて暮らしたい。それはいつのことになるのだろうか。

※「吉野」は大和国の名所。奈良県吉野郡一帯。

※「花」に「吉野」と付けている。これについて「華二、よし野付る事、嫌也。萩に宮城野、紅葉にたつた、同前也」(無言抄)のごとき議論があるが、そのような議論は後の時代になってからのものである。「散りぬれば花の下道たど／＼し／霞みはてたる御吉野の奥」(文明十八年十一月二日「何路」七一／七二)、「遅くもとへる萩の色／＼／宮城野や木の下露に友まちて」(難波田千句・第八「片何」三八／三九)、「折る袖にこそ紅葉ふかれ／立田山しぐる／峰の雲をかけ」(寛正五年四月二十八日「何路」四八／四九)など例は多い。以上、念のため。

※「花」に「古里」が寄合。例は、「花こそ人を忘れざりけれ／古里は見しにもあらずなりぬるに」(文和千句・第一「何人」二八／二九)など。証歌は割愛する。

御吉野を我がふる里といつか見む

30 都も憂き身経がたくぞなる

《解釈》都に暮らす身。普通なら華やかなものかも知れないが、私にとっては辛いことが多く、住みがたく感じる。吉野に隠棲して、年々の花を眺めて暮らしたい。結局、そこが私にとつての終の住みどころとしての故郷なのだろうか、それはいつのことになるのだろうか。

都も憂き身経がたくぞなる

31 をさまらむ世をもしらぬは命にて

《解釈》都に暮らす身。世が世なら有難いことかも知れないが、この乱世では辛いことが多く、かえって住みがたく感じる。いつになったら、この世の乱れが治まるのか全く解らない。こんな時代に生まれ合わせたのも運命なのだろうか。

をさまらむ世をもしらぬは命にて

32 いくさの場もたゞ秋の露

《解釈》戦場となった所の秋。今はただ一面に露が置かれるばかりである。乱世に次ぐ乱世。一体いつになったら、この乱世が治まるのか全く解らない。こんな時代に生まれ合わせたのも運命なのだろうか。

※「命」に「露」が寄合。先例は「命もながき夜半になさばや／袖ぬらす露の契りは忘れぬに」(応永二十九年三月二十八日「何人」三四／三五)など(証歌省略)。

※「いくさの場」という措辞は「戦場」の訓読。「武士はいくさの場を心にて」(三島千句・第四「山何」七一)など、連歌では普通に用いられるが、どういう訳か、和歌からは、私の調査の範囲で先例が検出されない。

いくさの庭もたゞ秋の露

33 風渡る蓬が月の白き野に

《解釈》戦場となった野の秋。蓬には露が結び、それに月影が白く映じ、風が渡るたびに、それが吹き散らされるのだ。

※「蓬が月」という表現が気になるが、和歌に「ふる里の蓬が月にむすぶ露さびしとかこつきり／＼すかな」(後鳥羽院御集・一五八九)という先例がある。当然、この歌を念頭に、前句の「露」に引かれて選ばれた措辞であろう。

※『老葉』に入集(一一五〇)。幽玄で哀感に満ちた極上の付合ではあるまいか。

風渡る蓬が月の白き野に

34 虫の音高く小夜更くる空

《解釈》蓬が風に靡く秋の野。夜が更け行くにつれ、空の月はますます皓々と地上を照らし、虫は音高く鳴く。

※「野」に「虫」、「月」に「空」と、対比的にクロスした寄合をとっているのがちよつとしたポイント。個々的には指摘するまでもないものである(例示省略)。

虫の音高く小夜更くる空

35 恨みやほこたへば人のわかざらむ

《解釈》秋の夜、虫が鳴いている。虫は、何かを恨みに思つて声を立てて鳴くのだと言われているが、一体、何を恨みに思っているのだろうか。その問いに、もし虫が答えているのだとしても、同じ声で鳴くばかりだから、人に理解されることはない。それが辛くて、夜が更けるのにつれて、虫は更に高い声で鳴くのだろうか。

※「虫は、何かを恨んで鳴く」という証歌としては「草の原露のよすがに鳴く虫の恨みやなぞと誰に問はまし」(続後拾遺・五・三六〇、伏見院御製)が分かりやすい。勿論「虫」に「恨み」が寄合。先例は「虫の音すこき暁の床／＼とに見ば月の恨みのよもあらじ」(応永三十二年三月二十五日「山何」一〇／一一)など。

恨みやほこたへば人のわかざらむ

36 思ひしらずは恋ひも死なばや

《解釈》私がどれほどあの人を恋し、そして恨みに思っているか、あの方は尋ねもしない。いや、仮に尋ねて、私がそれに答えたとしても、あの方は私の思いを理解してはくれないでしょう。私は、いつそのまま恋死にしたいと思ひます。そうすれば、あの方も、私がどれほどあの人を恋しく、また恨みに思っていたのかをわかってくれるかも知れません。

せ、また散らすものとして、風は、花とゆかりあるものだとということである。

※「花」が折を嫌うというのは「新式」では最重要とされる作法であるが、「本式」の場合、単に間隔十句以上で可とされる（発句参照）。本百韻において「花」は、第一七・二八・四四・五七・九五句の五か所で詠まれているが、間隔は全て十句以上である（第八九句は「花芒」で対象外）。

花ちらず風もよわるは憂きものを

18 山は霞に鐘響く音

《解釈》花を散らせた春の風。その風も、春も終わりに近づく今となつては、惜しまれてならない。山は霞に包まれ、里からは入相の鐘の音が響いてくる。

※「鐘」は「霞」と結ばれると「入相」のこととなり、夕時分とは間隔二句以上で可。従つて、第二二句の「夕べ」と指合にはならない。

山は霞に鐘響く音

19 はるかなる峰の灯かげ更けて

《解釈》春の夜空はおぼろに霞み、遠くの峰に灯が瞬いているのが霞の中に見える。あのあたりに寺でもあるようだ。夜は更けて行く。鐘の響きが微かに耳に届く。その寺の半夜の鐘であろうか。

※『老葉』に入集（毛利本一一七〇、筑波大学本一一五六、愚句老葉一三九一）。遠くの峰の寺の鐘の音が届くのは、あたりが静かだからと気付かせる所が見事である。なお、以下『老葉』入集句の句番号は、全て毛利本で代表させる。

※「峰の灯」というだけでは、寺かどうかは断言できないが、山の峰近くで夜が更けるまで灯りを点すのは寺以外に考えられない。『愚句老葉』宗祇自注に「居所なくとも灯などはする物にや、不審のかた侍りし」とあるのは、その点について発せられた疑問であろう。宗祇の返答は「鐘・灯などはさもやと侍りし」というもので、「鐘」や「灯」は居所の語をとまわずに用いても可というものである。「晴るゝ夜の雪の松風明けわたり／いづくともなき鐘のしづけさ」（三島千句・第二「何船」三九／四〇）、「よる波ならし芦そよぐ音／しづかなる灯とほく暮るゝ夜に」（葉守千句・第二「何路」四六／四七）などが例として挙げられる。

はるかなる峰の灯かげ更けて

20 月は誰にか心澄むらむ

《解釈》遠くの峰に灯火が瞬いている。あのあたりに寺でもあるようだ。夜が更け行くにつれ、月はますます澄んだ光を放つ。月は、一体誰のためにこんなにも澄んだ光を放つのだろうか。その心を知りたいと思う。

※山川草木、花鳥風月、悉皆有情。ありとあらゆる存在に「心」があるとするのが宗祇の世界観。それが体得できれば、普通に右のごとく解釈できる。それには、彼の連歌を数多く味読するよりない。以上、若い人のため。妄言多謝。

月は誰にか心澄むらむ

21 秋を秋と知れるばかりは多き世に

《解釈》秋になると、月は、一体誰に眺めてもらおうと思つてあのように澄んだ光を放つのだろうか。その心を知りたいと思う。秋が来ても、ただ秋が来たとしか感じない人が世間には多いのに……。

秋を秋と知れるばかりは多き世に

22 夕べを分くはたゞ萩の声

《解釈》秋の夕べ、萩の葉を吹く風の音に耳を澄ます。やはり秋の夕べは格別のものだと思う。秋が来ても、ただ秋が来たとしか感じない人も多いけれども……。

夕べを分くはたゞ萩の声

23 たのめ置く露の道芝あともなし

《解釈》夕方となったが、昨日までは道芝にすがるように置かれていた露も今日はいく見えなくなつていく。だから今、夕方になったと思わせるものは、萩の葉を吹く風の音ばかりである。

※夕露は、地表付近の水分が昼間の熱で気化し、それが夕方になって気温が低下して液化した時に置かれるものである。従つて、昼間の気温が全く上がらなかつた晩秋の日などには、夕露は置かれない。そのような日の情景である。

※「夕べ」に「露」が寄合。例は「この夕べ昔おぼゆる秋なれや／命のあるに露も忘れず」（文和千句・第四「何物」九一／九二）など（証歌省略）。

たのめ置く露の道芝あともなし

24 我やはかれむ人は憂くとも

《解釈》昨日までは道芝にすがるように置かれていた露も、今日はもう見えない。秋も更け、草木はみな枯れてゆく。しかし、私のあの人を思う心は枯れることはない。たとえ、あの人、私にとつてどれほどつらい存在であるとしても……。

我やはかれむ人は憂くとも

25 友はみなよからむこそは契りなれ

《解釈》互いによき友として生きるといふ関係は、全て前世からの約束事。たとえ、他の人が君につらく当たろうとも、私は君から離れることはないのだ。

友はみなよからむこそは契りなれ

26 とすればさわぐ籠のうちの鳥

《解釈》籠に飼われている鳥たちの様子がどうも落ち着かない。人間の場合もそうだが、友として仲良くできる関係というのは、全て前世からの約束事のようなのだ。

とすればさわぐ籠のうちの鳥

27 雲風に春は心のさそはれて

《解釈》春になつて、籠に飼われている鳥が何かにつけて落ち着きなく鳴く騒ぐようになった。やはり鳥としての本性で、雲や風に心が誘われるのであろうか。

つべし」とある。新式の連歌なら、秋季は三句以上連続させねばならない（春季も同じ）。以降、本百韻には、第一七〇一八句、第二七〇二八句、第四三〇四四句、第四六〇四七句、第五六〇五七句、第六三〇六四句、第九六〇九七句の七か所で同様の例が存在するが、一々に指摘しない。

海士もやは波の枕はやすからむ

10 芦辺に鴨の霜はらふ声

《解釈》冬の夜の海辺。汀の芦の群生している辺りから鴨の鳴き声をする。あれは、寒さに目を覚まし、羽に置かれた霜を払っているのであろうか。こんな夜は、波の枕に臥し馴れている海士だつて安らかに眠ることはできないだろう。

※「霜」に「下」利かして「下人」と賦している。ここで初折表十句が終了。以後、賦物をとる必要はない。なお、これ以降、第一一〇二四句は初折裏、第二五〇三八句が二折表、第三九〇五二句が二折裏、第五三〇六六句が三折表、第六七〇八〇句が三折裏、第八一〇九四句が名残表で、第九五句から挙句までの六句が名残裏の句となる。以後、この点については一々に指摘しない。

芦辺に鴨の霜はらふ声

11 しづかなる流れを寒み日は暮れて

《解釈》寒い冬の日。日が暮れるにつれて気温はさらに下がる。水の流れる音が静かになったのは、凍りはじめたのだろうか。芦の群生している辺りから鴨の鳴く声をする。あれは寒さに目を覚まし、羽に置かれた霜を払っているのであろう。

※第九句以降、水辺が三句連続する。従って、体用の沙汰が必要であるが、第一一句の「流れ」は「体用の外」なので、問題はない。「本式」において「体用の外」という範疇があったのかどうかは議論の余地があるが、当時、宗祇がそのように考えていたということである。

しづかなる流れを寒み日は暮れて

12 浮かべる雲の空のはかなさ

《解釈》寒い冬の日。日が暮れるにつれて、気温はさらに下がる。水の流れる音が静かになったのは、凍りはじめたのだろうか。浮雲の行くのが見える。間もなく、空の彼方にはなくなってしまうことだろう。

※「流る」に「雲」が寄合。先例は「沢にぞ山のかげも流る」／尾上よりさまよふ雲の末はれて（美濃千句・第四「何路」九六／九七）など。また「暮る」に「空」が寄合。例は「秋の日は時雨ふる間に暮れはて」／空冴えわたる初雪の頃（顕証院会千句・第一「何船」七／八）など。共に、所謂「体付」である。

※前句と付句との間に論理的関係は全くないようであるが、気温が急激に低下するのは寒冷前線の通過時の現象。従って、空の雲の移動は速いということで、当時の人々には体験的に納得できる付合となつていのである。

浮かべる雲の空のはかなさ

13 行きとまるかぎりし誰もしらぬ身に

《解釈》空に浮かんでいる雲。一時的に空にとどまることはあっても、やがてどこかにはかなく消えて行く。その消えていった雲が最後に行きつく果てはどこか、誰も知らない。人間も雲と同じ。この世にとどまるものがあっても、それははかなく一時的なもの。その行きつく果ては、誰も知らない。

※「行雲流水」などという成語があるように、「雲」に「行く」が寄合。例は「分け入る方の雲の奥山／三吉野や行くもかへるも花の宿」(嘉吉元年二月二十六日「何人」三四／三五)など。ただし、これは所謂「用付」だから、後の連歌では好まれない。

14 遠く契るな年月のすゑ

《解釈》年や月が終わりになつても、すぐ次の日に、次の年・次の月となる。年月の行き止まりになる時は、誰も知ることができない。時間は永遠で、人はいつか死ぬ。だから、「いつまでも」などと約束するのは無意味なことなのだ。

遠く契るな年月のすゑ

15 今来むを聞かば遅きもいかゞせむ

《解釈》「この年末」とか「この月末」とかいう約束だったので、まだ先のことだと思つていた時、その人から突然「直ぐに行きます」などと言ってきたら、どうしようか。用意も何も、全て遅くなってしまう。だから、約束の日にとちというものは、あまり先に設定するものではない。

※宗祇の独吟であるから、所謂「謂はれざる句」ではないはずであるが、私には、この付合の前句と付句をうまく論理的に結びつけて解釈することができない。自分でも正しいと思えないまま無理やり解釈して、右のごとくである。如何。

今来むを聞かば遅きもいかゞせむ

16 ゆかりにさへぞ思ひうかるゝ

《解釈》もし、あの人の所へ行つて「直ぐに来ますよ」などと言われたのに、本人がいつまでも出て来なかつたら、どうしようか。そんな時に、あの人にゆかりの人がいることを知ったら、その人にまでも浮かれた気持ちが起こりそうだ。

※『源氏物語』空蟬巻の、空蟬に待ちぼうけを食わされた源氏が軒端萩と情を交わすシーンを念頭においた付合かと考え右のごとくであるが、自信はない。如何。

ゆかりにさへぞ思ひうかるゝ

17 花ちらす風もよわるは憂きものを

《解釈》春風が暖かく吹き、花の木の芽を膨らませはじめている。開花はいつごろだろうかと心が浮かれる。風は花を散らすものだけれど、それは花が咲いた後の話。今は暖かい風が吹き弱るのは、開花が遅れるのではないかと心配になるのだ。

※前句の「ゆかり」を解釈の中でうまく言い換えることができなかったが、花を咲か

「涙」「船」「竹」「煙」も十句去。『連歌本式』に「月・花・松・夢・涙・船・竹・煙、各十句可去」と見える。以後、この点については一々指摘しない。

※『宇良葉』に入集（七）。また『自然齋発句』に入集（二六）。

ひかじ今日松の思はむ老の春

02 梅かをる野の若菜つむ頃

《解釈》初子の日の野辺。梅の香りが漂っている。人々は野辺に出て若菜を摘み、小松を引くが、私は気が進まない。今さら若返りたいと思うような年齢ではない。松だつて、そのように思っていることだろう。

※「若人」と賦している。

※「春」に対して「梅」も「若菜」も寄合。ただし、そのレベルの寄合を一々指摘してはキリがない。以下、寄合の指摘は必要と判断される範囲に限定する。

※「松を引く」と「若菜」とが寄合。先例は「野に出でゆくは若菜つむらむ／うちむれて引くや小松の初子日」（文安月千句・第二「何船」三六／三七）など。

梅かをる野の若菜つむ頃

03 山ぎはの沢水遠く雪きえて

《解釈》梅の香りが漂う野辺、若菜を摘む人の姿が見える。山に残っていた雪も消え、山際の沢から出た水の流れが、野を経て、一筋遠く続いているのが見渡される。

※「山人」と賦している。

※山の雪が融け水量が増加し、山際の沢から流れ出ると、言外に理屈を利かしている。

山ぎはの沢水遠く雪きえて

04 暮るゝや煙むかひなる里

《解釈》山に残っていた雪も消え、その水が山際の沢から出て、一筋の流れとなつて続いている野を行く。日も暮れはじめたようだ。夕餉の準備をしているのである。向こうの里に、煙の立ち昇っているのが見わたされる。

※「里人」と賦している。

暮るゝや煙むかひなる里

05 誰がすむを我が宿りとやいそぐらむ

《解釈》旅の道。日も暮れはじめた。向こうの里に夕餉の煙の立ち昇っているのが見える。ぐずぐずしていたら、野宿するハメになりそうだ。どんな人が住んでいる所かわからないが、今夜は、あの里に宿りをとるより仕方あるまい。

※「誰人」と賦している。

※発句から春季が連続して四句詠まれてきたが、ここで切れる。『連歌本式』には「季は五句去。但し、此うち他の季なくば、二十句へだてゝも、同季はならず」とある。従つて、ここ当分、他季の句が出ないかぎり、春季の句を出すことができない。

誰がすむを我が宿りとやいそぐらむ

06 心のあるは旅に見まほし

《解釈》日も暮れはじめた。ぐずぐずしていたら野宿するハメになりそうだ。とにかく宿れそうな所があったら、そこに泊めてもらうより仕方あるまい。どんな人の住まいかわからないが、その人が「心ある」人であればいいのだけれど。

※「旅人」と賦している。

心のあるは旅に見まほし

07 姨捨や仮寝を月になぐさめて

《解釈》姨捨山の仮寝。美しい月を眺めていると、何か心が慰められる。一人旅を続ける私の寂しさ・辛さを知ってくれる人などいるはずはないが、あの月だけは、それを知ってくれているのだろうか。このような月と、また会いたいものだ。

※「月人」と賦している。

※「姨捨」は信濃国の名所。長野県千曲市、JR姨捨駅北東部一帯。第七句で名所が出されている。「新式」の連歌ならあり得ないことだが、『連歌本式』に「面に名所をすべし」云々と見える。この場合の「面」とは、初折表のことである。

※「月」は「新式」では七句去物だが、「本式」では十句去（発句参照）。本百韻において「月」は、第七・二〇・三三・四七・五八・七二・九〇句の七か所で詠まれているが、間隔は全て十句以上である（第一四句は月次の「月」で対象外）。

※付句の仕立は「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月をみて」（古今・一七八七八、よみ人しらず）に依拠する。『大和物語』の姨捨山説話で有名。

※前句の「心のあるは」は、先の付合では人間。この付合では「月」のこととなる。「花鳥風月、悉皆有情」が宗祇の世界。全てが擬人化される。以下頻出する。

姨捨や仮寝を月になぐさめて

08 衣うつ夜の風なしをりそ

《解釈》姨捨山の仮寝。美しい月を眺めていると、旅のつらさも、何か慰められた気持ちになる。秋風が身にしみる。その風にのつて、近くの里で衣を打つ音が聞こえて来る。風よ、どうか私にこれ以上つらく当たらないでくれ。

※「夜」に「世」を利かして「世人」と賦している。

※「姨捨」に「衣うつ」が寄合。例は「姨捨山の秋の仮ふし／衣うつ音さへ旅の恨みにて」（延徳四年六月一日「何路」八二／八三）など。「更科や夜わたる月の里人もなぐさめかねて衣うつなり」（続古今・五・四七三、順徳院御歌）が有名。

衣うつ夜の風なしをりそ

09 海士もやは波の枕はやすからむ

《解釈》海辺での旅宿。波の音にまじって、近くの里で衣を打つ声が風にのつて聞こえて来る。こんな寂しい夜は、波の枕に臥しなれた海士の身であっても、安らかに眠ることはできないだろう。風よ、どうかこれ以上つらく当たらないでくれ。

※「海士人」と賦している。

※秋季が第七・八句の二句で捨てられている。『連歌本式』には「季は二句にてもす

宗祇独吟「本式連歌百韻」 注解

勢田 勝郭

Commentary of Honshikirenga - Hyakuin

Katsuhiko SETA

宗祇連歌中、後期の代表作の一つである明応五年正月九日「本式何人百韻」に対し、現在の研究レベルに則った新たな注解を施す。

本稿が取り扱う連歌は、宗祇が明応五年正月九日に独吟したと伝わるものである。通常の連歌が「新式」に則って詠まれるのに対し、「本式」に則って詠まれた特殊な作品であるが、その中の一〇句が自撰句集『老葉』『宇良葉』に収載されており、宗祇晩年の代表作の一つとすることに異論はあるまい。本稿は、それについて、今日の研究レベルに則した注解を提供しようとするものである。なお、同様の試みが伊藤伸江氏によってもなされつつあるが（『宇良葉』所収『本式連歌』訳注（一）…愛知県立大学『説林』第七二号、令和六年、以下継続）、互いに補いあう所のあるものとして位置づけていただければと思う。紙幅の都合で具体的に引用することはできなかったが、参考とさせていただいた点が多い。お断わりと感謝を申し述べる次第である。

テキストは、続群書類従本を基礎とし、諸本と校合して、仕立・付合・去嫌の面でもっとも問題がないと思われるものを私に設定して用いた。ただし、紙幅の都合上、その設定の過程について具体的に述べることは省略せざるを得なかった。また、寄合の指摘も連歌の注解では重要であるが、これも必要と思われる範囲にとどめた。去嫌については、末尾に一覧表の形で示すこととした。それについては、拙稿「連歌去嫌の総合的再検討」（奈良工業高等専門学校「研究紀要」第五二号）を参照していただきたい。ネット上で見ることができる。一覧表の「凡例」も、そこに譲る。そこで解説しているのは所謂「新式」に則った連歌に対するものであり、本作品は「本式」に則ったものであるが、両者で相違する所は「群書類従」巻三〇六『連歌本式』に具体的に記述されている。以上、各点、了解されたい。

明応五年正月九日

賦何人連歌

01 ひかじ今日松の思はむ老の春

《解釈》今日は初子の日。人々は野辺に出て小松を引くが、私は気がすすまない。今さら若返りたいと思う年齢ではない。松だつて、そう思っていることだろう。

※賦物は「何人」。「老」によって「老人」と賦される。「新式」であれば、賦物がとられるのは発句のみであるが、群書類従本『連歌本式』には「面十句、毎句、発句の賦物に合せてすべし」とあり、以後、第十句まで賦物をとらねばならない。

※松は千年の齢を保つと言われていた。小松にはその生命力が籠められており、それを根ごと引くことによって自身の体内にとりこもうとする行為。「引きてみる子日の松は程なきをいかで籠れる千代にかあるらむ」（拾遺・一六・一一〇三、恵慶法師）が解りやすい。明応五年の初子の日は正月九日、宗祇は七十六歳である。

※「松」は「新式」では七句去物であるが、「本式」では十句去である。「月」「花」「夢」